

『宇治拾遺物語』 一〇八 「越前敦賀女観音助給事」の観音靈驗性をめぐって

川口 明子

はじめに

本稿は、『宇治拾遺物語』（以下『宇治拾遺』とも）一〇八「越前敦賀女観音助給事」について、主に対話場面の表現を中心に、同話性の強い『今昔物語集』（以下『今昔』とも）巻十六第七「越前国敦賀女、蒙観音利益語」と比較し、『宇治拾遺』にみられる観音靈驗性¹⁾について考察するものである。ここでいう観音靈驗性とは、説話において登場する人物が観音の加護を受けて幸せになるといふ、一般に観音靈驗譚と呼ばれるものの核となる性質をいう。具体的な方法として、登場人物の対話場面における両話の表現に注目する。

『宇治拾遺』第一〇八話は、越前国敦賀に住む人の「女」（以下、女とする）が、両親没後、観音の利益を受けて幸せになるといふ話である。観音への祈りによって幸せを手にするところから、一般に観音靈驗譚として扱われる。概要は次の通りである。

越前国敦賀に住む一家はそれなりの生活をし、両親は一人娘を大切に育てる。そして自分達が生きているうちに、娘の将来に不安のないようにと、男と引き合わせるが、いずれも長続きしない。見合いを諦めた親は、家の裏にお堂を建て、「娘を助けてほしい」と観音供養を始める。しばらくして女は両親を立て続けに亡くし、生活

は食べることもままならない程に困窮していく。泣く泣く観音に救いを願ううち、女はある夢を見る。その夢で、お堂の裏から現れた老僧が次のようなお告げをする。

いみじういとをしなければ、男合はせんと思ひて、よびにやりたれば、明日ぞこ、に來つかんずる。それがいはんに従ひてあるべき也。

夢から覚めた女は、このお告げを信じて男の訪れを待っていると、七、八十人の供を連れ、若狭へ向かう男あるじ（以下、男とする）が現れ、女の家に宿ることになった。生活に困窮している女は彼らを饗応したいと思いつつも、ただ途方に暮れていた。ここで男視点の話に変わるのだが、それは「一」で後述する。そこへ昔、女一家の下女だったという「むすめ」（以下、娘とする）が現れると、娘は早速食事を用意し、馬の飼料まで調達して、彼らを盛大に饗応した。喜んだ女は娘に紅の生絹の袴を取らせる。そして男に見初められた女は家を出るのだが、出立前に両親の建てたあの観音堂へ行く。女は、そこで観音の肩に娘に与えたはずの袴があるのを見つけ、娘が観音の化身だったことを知って驚き、号泣するのである。

このあと、二人が仲睦まじく暮らして多くの子供を儲けたこと、敦賀にも常に出かけて観音に奉仕したこと、また女を助けた娘につ

いて、その後尋ねても見当たらなかったことが語られる。これと同語である『今昔』卷十六第七は、一連の出来事を観音の誓願によるものであることを強調した上で、「世ノ人此レヲ聞テ、專ニ観音ニ可仕シトゾ云ケルトナム語り伝タルトヤ。」という、広く一般に観音婦依を勧める話末評語を付す。それに対して、話末評語をもたない『宇治拾遺』第一〇八話は、「この男女、たがひに七八十に成まで榮へて、男子、女子、産みなどして、死の別にぞ別れにける。」と、改めて二人が子宝に恵まれて繁榮し、死ぬまで長く添い遂げたことを語る独自文でもって締め括る。説話の叙述上、多子のことなど重複しているようでもあるが、二人の後日譚のような一文で語り終えるところに、あくまでこの「男女」にこそ観音靈験がもたらされたとする『宇治拾遺』のこだわりが見て取れるのではなからうか。

このような見通しのもと、以下『宇治拾遺』の観音靈験性について考察を進めていくが、その際、特に對話場面の表現に注目するのは、『宇治拾遺』の特色が会話、および会話文（以下会話（文）とする）にみられるからである。例えば、西尾光一氏は『宇治拾遺』の特色として『日本古典文学大辞典』に五点挙げるが、その二点で会話（文）に注目している。

（一）……直接的な口誦採録によるもの、もしくはそうした採録のおもかげを顕著に残しているものがある。……書承の認められる説話の中にも、口誦の趣の豊かな話があり、全編を通じて会話を多く盛り込んだ軽妙な語り口が、文章表現の中に生かされているものが多いところに文学としての第一の特色がある。

（五）……漢文脈の出典は和文脈に書きやわらげてあり、全編を通じて王朝の物語の文体に近く、しかも口誦の味わいを多く残し、会話を豊富に取り込み、説話物語の集としての典型的な表現をなしている。

このように、『宇治拾遺物語』の特色として口誦の趣や味わいとともに指摘される、会話（文）のある對話場面の語句や表現を對話表現と総称することにして、それが観音靈験譚としての『宇治拾遺』第一〇八話にどのような意味的作用をもたらしているのか、同話との比較分析を通して考えてみたい。

なお、『宇治拾遺物語』、『今昔物語集』、『古本説話集』の本文引用はすべて新日本古典文学大系（岩波書店）により、本文中の傍線や記号は稿者が付した。また、初出のみ作品名・巻名・説話番号・表題を表記し、以降は作品名や巻数、説話番号で略記した。

一、『宇治拾遺』における男の扱いについて

本話の中心人物は『宇治拾遺』、『今昔』ともに女であるが、一方で女と結ばれる男の視点で話が進むところもある。特に對話表現に注目すると、『宇治拾遺』で男主体の語りが現れる場面があるので、『今昔』の本文と対照させて次のⅠに引く。

このⅠの場面では、『宇治拾遺』、『今昔』に共通して、男が女の家を宿を借りた日のことが男の視点で語られる。昼間女を覗き見た男は、亡き妻と生き写しの女に目も眩むほど動揺する。そして、日が暮れてから接近して確かめてみると、話し方まで亡き妻と同じで、

自分が若狭へと出かけなければこのような出会いはなかった、と喜びを噛みしめる。

ここで問題としたのは、男の心中文である傍線部①③と、波線部の「とて」である。『今昔』では、傍線部①に相当する心中文はなく、男が喜びとともに女と契りを交わしたことが地の文で語ら

I (宇治拾遺)

昼やどりある程に、かたすみにあたる所も、
何の隠れもなかりければ、

いかなるものゝあたるぞと、のぞきて見るに、
たゞありし妻のありけるとおぼえければ、

目もくれ、心も騒ぎて、

「いつしかと暮れよかし。
近からんけしきも心みん」

とて入来たる也けり。
物うちいひたるよりはじめ、

露たがふ所なかりければ、
「①あさましく、かゝりける事もありけり」
とて、

②「若狭へと思ひ立たざらましかば、
この人を見ましやは」

③と、うれしき旅にぞありける。
若狭にも十日斗あるべかりけれども、

この人のうしろめたさに、
「明けば行て、又の日、帰るべきぞ」
と返／＼契り置て、

寒げなりければ衣も着せをき、……

A

れる。一方で傍線部①の心中文及び波線部「とて」は、『宇治拾遺』にあつて『今昔』にはなく、また傍線部③と⑥を比べても、男の喜びの表現に『宇治拾遺』と『今昔』で違いがみられる。これらは男が自己と対話する場面を構成する対話表現であるとして、次のよう

(今昔)

其レガ、昼宿ツル時、

「何ナル人ノ居タルゾ」ト思テ臨ケルニ、
只失ニシ妻ノ有様ニ露違フ事無カリケリ。

「只其レゾ」ト思エテ、
目モ暮レ心モ騒ギテ、

「何シカ、日モ疾ク暮レヨカシ、
寄テ近カラム気色ヲモ^{みむと}見」テ、
入来ル也ケリ。

其レニ、物打云タル気色ヨリ始テ、
万ノ事露違フコト無カリケリ。

④喜ビ乍ラ深キ契ヲ成ヌ。

「⑤若狭ノ国ヘ不行ザラマシカバ、
此ノ人ヲ見付ケシヤハ」

⑥ト返ニス喜テ、

⑦其ノ夜モ睞ヌレバ、若狭ヘ行クトテ、
女ノ着物ノ無キヲ見テ、衣共着セ置テ超ニケリ。

波線部「とて」は、傍線部①と②の間に位置しており、また①、②はどちらも自己と対話する男の心中文である。このことに関連して、『宇治拾遺物語』八六「清水寺二千度参詣者、打入双六事」にみられる「といひて」の例を用いて論じる。ここでは、同話性があるものとして、『今昔物語集』卷十六第三十七「清水二千度詣男、打入双六語」と『古本説話集』（以下「古本」とも）下五七「清水寺二千度詣者打入双六事」の本文を比較対象として用いる。

なお、この『今昔』卷十六第三十七話の本文には所々破損による欠字がある。このうち欠字部分の内容について、稿者は『宇治拾遺』第八十六話、『古本』下巻第五十七話との同話性から逸れるものではないとして取り扱い、論じる中で欠字部分やその内容を補う必要があるときは、□で該当部分を表わした。

この説話は、他に賭け物がなくなるほど双六で負けた侍（以下、負け侍）が、人の真似で清水寺に二千度詣したことを賭け物にするというものである。その話に乗り、負け侍から二千度詣を受け取ることにした相手の侍（以下、勝ち侍）は律儀に三日間精進潔斎した後、譲渡の日を迎える。「さあ清水へいこう」という勝ち侍に、負け侍は「馬鹿者にあつたものだ」と思いながら、二人は清水寺に参つて、僧に二千度詣譲渡の証文を書いてもらう。証文をもらった勝ち侍は本尊を臥し拝んで帰った。するとその後、負け侍は思いもしないことで捕縛され、一方の勝ち侍は予想外に立派な家系の妻を娶り、生活も仕事も万事成功を取めたという。このあらすじは『宇治拾遺』に沿ったものだが、『今昔』、『古本』においても概ね同じ筋書きであり、清水寺の観音利益を勝ち侍が受けたことから、『宇治拾遺』

第一〇八話と同様、観音靈驗譚として扱われる。では「といひて」による対話表現について、本文を比べる。

次に示した表は、負け侍と勝ち侍の対話場面について、『宇治拾遺』の本文と『古本』、『今昔』の本文を下に併記したものである。表の1～5をみると、各発話主体が交互に替わっていることがわかる。

この発話者の交替は、日常の会話場面でよくみられる。しかし『宇治拾遺』の本文に注目すると、表の4には負け侍の言葉がなく、その代わりに3「此の勝ちたる侍、いとよき事也。渡さば、得ん」の後に傍線部B「といひて」が入って、5で勝ち侍が連続して言葉を発していることがわかる。通常、交互に交わされるはずの会話の順番取りシステムが破綻する『宇治拾遺』の対話表現には、『古本』や『今昔』にはない語り手の意図的な操作が示唆されるが、ここでは第一〇八話の「とて」に類似する「といひて」による対話表現について論じる。

では、表の『古本』3をみる。すると、『宇治拾遺』における「といひて」と同じ位置に傍線部C「と言ひければ」がみえる。しかし、このあと負け侍の言葉が続いているので、5にみる勝ち侍の意向の変化には、4にある負け侍の微笑んで言った言葉の影響がみられる。また、原因や理由の確定条件を表わす傍線部C「と言ひければ」は、3だけでなく4にもみえる。すなわち、4で負け侍が笑みを浮かべながら渡そうとしたので、5で勝ち侍が勘づいて考えを変えたと捉える見方である。『今昔』の本文は3から5にかけて欠字が多く詳細は分らないが、3と5の勝ち侍の言葉の間には負け侍のものとみえる会話文があつたと推測できる。よって、『今昔』におい

ても、勝ち侍の意向の変化には負け侍からの影響をみる事ができる。では4で負け侍の会話文がない『宇治拾遺』において、勝ち侍の意向の変化をどのように捉えればよいか、再度、表の3～5をみる。

『宇治拾遺』では3「それはよいことだ。渡してくれるなら、もらおう」と勝ち侍の快諾の言があるが、続く4の負け侍の言葉は語られず、5で「いや、こういうふうにして受け取ってはなるまい。……」と勝ち侍の意向の急変を示す。この部分で、『古本』と『今昔』

になく『宇治拾遺』にあるのが、傍線部B「といひて」である。

(表)

番号	宇治拾遺物語	古本説話集	今昔物語集
1	「我、持たる物なし。只今たくはへたる物とは、清水に二千度参りたる事のみなんある。それを渡さん」といひければ、	「わが持たる物なし。たゞ今貯へたる物とは、清水に二千度参りたることのみなんある。と言ひければ、	「我レ露持タル物無シ。只今貯ヘタル物トテハ、清水ノ二千度詣タル事ナム有ルヲ、其レヲ渡タサム」ト云ヘバ、
2	かたはらにて聞く人は、謀る也らに思て笑けるを、とおこに思て笑けるを、	傍にて聞く人／＼は「うち謀るなり」と、鳥潜に思ひて笑ひけるを、	傍ニ見証スル者共、此レヲ聞テ、「此レハ打量ル也ケリ。嗚呼ノ事也」ト咲ケルヲ、
3	此の勝たる侍、 B「いとよき事也。渡さば、得ん」といひて、	この打ち敵の侍、 C「いとよきこと也。渡さば得ん」と言ひければ、	「此ノ勝タル□□□□、 「此レ余吉キ事□□□□、 二千度詣ヲ渡サバ、速ニ□□□□」
4	(なし)	この負け侍、 「さは渡す」と、微笑みて言ひければ、	此ノ□□□□、 云ヘバ
5	「いな、かくては請けとらじ。三日して、此よし申て、おのれ渡すよしの文、書きて渡さばこそ、請けとらめ」といひければ、	「いな、かくては受け取らじ。三日して、このよし申て、をのれに渡すよしの文、書きて渡さばこそ、受け取らめ」と言ひければ、	勝侍ノ云ク、「否ヤ、此クテハ不□□□□二□□漂 樋ニ己レ渡ス由ノ渡文ヲ□□□□ 金打テ渡セバ、請取ヌ」 ト云ヘバ、

この「といひて」という表現は、勝ち侍の3「いとよき事也。渡さば、得ん」と5「いな、かくては請けとらじ。……」の二つの会話文を二分する位置にあり、発話者は両方勝ち侍で、発話相手は負け侍である。よって、この二つの会話文をなぜ「といひて」で二分したのが「といひて」の機能が示すところとなる。この二つの会話文をみると、前文が快諾、後文が固辞の意を表わして互いに相反しており、その結果勝ち侍の話しぶりにも変化が生じる。このことは、「といひて」という表現に、その前後で発話者の口調変化を表わす機能があることを示す。

これに従うと、4で負け侍の言葉がない『宇治拾遺』の勝ち侍は、何かしらの要因で考えを変えたことになり、それは『宇治拾遺』のもつ論理が『古本』、『今昔』とは相違する可能性を示す。この可能性について、『宇治拾遺』の勝ち侍に働いた作用として、次の二つが考えられる。一つは、2の周囲の人々が負け侍の意図を見抜いて笑う描写である。勝ち侍はこれを見て一計を案じ、3で一芝居打ったという可能性である。この可能性は、『古本』や『今昔』と比べると、勝ち侍の勘が早く働き、3の時点で5の「いな、かくては請けとらじ。……」の判断を終えていたことになる。もう一つは、2の時点で気付いたのではなく、3の「といひて」による間において、二千度詣の証文はきちんと受け取るべきだという妙な生真面目さが働いたという可能性である。この場合は、勝ち侍の内省による意向の変化ということになる。

このような二つの可能性は、いずれにしても勝ち侍の後に得た幸せが単なる二千度詣による観音の功德ではなく、勝ち侍自身の考えによって獲得されたものと推察できる。そして、そんな勝ち侍の成功とは正反対の転落の道を辿った負け侍は、二千度詣を軽視し、勝ち侍に譲渡した愚か者として読者の笑いを誘うのである。これにより、『宇治拾遺』の語りは、双六の賭け物として参詣の証文をやりとりし、その利益を確実に得ようとする勝ち侍の強かさを際立たせ、さらにそれは『今昔』や『古本』の語りに比べ、勝ち侍の後の成功が勝ち侍自ら選び取った結果であることを意味する。そしてこのことは、『宇治拾遺』第八十六話における観音靈驗性にも影響する。すなわち、勝ち侍の観音の靈驗を得ようとする強かさに焦点が絞ら

れると、観音が衆生を広く救済するという一般的な靈驗譚における観音救済の普遍性が希薄化することを示すのである。

以上のことから、この第八十六話の同話比較では、同一話者による二つの会話文があるとき、それを二分する位置にある「といひて」には、口調変化の機能があることを示した。そして、その対話表現に注目して読むと、発話者の積極的な行動が焦点化される分、相対的に観音靈驗の普遍性が希薄化することを指摘した。そこで再度『宇治拾遺』第一〇八話のIの対話場面に戻り、波線部「とて」による対話表現にも同じ口調の変化がいえるか、また観音の靈驗を希薄化させるような発話者の積極性がいえるかを検証する。

波線部「とて」の前後にある傍線部①、②の男の心中文をみると、「とて」の前文で「あさましく、かゝりける事もありけり」とし、見た目だけでなく物言いまで亡き妻と生き写しの女に、男は驚く。そして「とて」の後文で「若狭へと思ひ立たざらましかば、この人を見ましやは」と旅に來なかつた場合を想像し、この旅を「うれしき旅」だと振り返る。

このようにみると、女と出会った喜びを思う点で前後の文は類似するが、前文ではその時点での感動、後文では今回の旅全体の内省である点で、内容に違いがある。よってこの違いから前後の文に口調の変化を想定することができると、本話における二つの心中文の間に位置する「とて」にも、『宇治拾遺』第八十六話でみた「といひて」と同じ口調変化の機能があるといえる。

では次に、この男の、自己と対話する心中文が『今昔』のものとのように違うのかを考える。『今昔』では、傍線部①にあたる男

の心中文がなく、傍線部④「喜ビ乍ラ深キ契ヲ成ヌ」とあるように、男が女と結ばれたことを語り手が述べる。そして、『今昔』は傍線部⑤にあたる男の心中を「若狭ノ国ヘ不行ザラマシカバ、此ノ人ヲ見付ケシヤハ」と語り、こちらは『宇治拾遺』の傍線部②と類似する。しかし、続く傍線部③「と、うれしき旅にぞありける」に相当するものは『今昔』になく、傍線部⑥「ト返ニス喜テ」に続いて傍線部⑦「其ノ夜モ嗟ヌレバ、若狭ヘ行クトテ」とする。

問題は、この傍線部③「うれしき旅にぞありける」の「にぞありける」である。この表現は、鎌倉時代に入ると慣用化し、音韻変化を起こして「にざりける」となっており、一語相当に機能する現在時点での確認表現である。そうすると、傍線部①から③における『宇治拾遺』の語りの視点は、男にあることがわかる。つまり『宇治拾遺』において、傍線部①から③へ続く一連の自己との対話は、敦賀の女の話から離れ、若狭へ向かう男の視点で語られたものであることを示すのである。

この説話の冒頭を振り返ると、本文中で観音を信仰し、夢告を受けたことが語られるのは敦賀の女だけであった。そのため男に訪れた幸せは、女の観音信仰により周囲に波及して発生した現象の一つに過ぎない。よって、「喜ビ乍ラ……」や「返ニス喜テ」と男の喜びを語り手の視点から述べる『今昔』の語りは、女に起きた観音霊験譚の範囲内で受容できるが、『宇治拾遺』において男の視点で自身の旅を述べるこの語りは、男にも観音の霊験が生じたことを了解することができるのである。

また、『宇治拾遺』におけるAをみると、男は若狭への旅が通常「十

日斗ある」のを縮めて、敦賀を発った翌日に戻ると女と約束している。その後、男は約束通り帰ってくるのだが、この『今昔』にないAの部分があるために、『宇治拾遺』には女と巡り逢ったこの機会を逃すまいとする男の積極的な姿勢が現れている。この積極性については、先述した『宇治拾遺』第八十六話で観音の霊験を確実に得ようとした勝ち侍の行動力にも通じるものがある。

これらのことから、波線部「とて」による対話表現と傍線部③における「にぞありける」に注目すると、『宇治拾遺』の語りは女と男二人を視点人物として設定し、説話を展開させていることがわかる。よって、『宇治拾遺』は『今昔』に比べ、男と女の二人を一般的な男と女ではなく、各々個人として語る必要性が生じることになる。このことはこの男の確実に女と結ばれようとする行動の積極性にもいえる。この男の行動の積極性が女との結婚を導き、説話末尾の一文で語られる、男と女、二人の長生と一家繁栄へとつながることを考えると、結果として男も観音霊験の享受者といえるのである。そして、男の観音霊験の享受は観音信仰における他力救済の性質とは異なる、いわば自力救済的な性質があるともいえる。このことは、「はじめに」でみた『今昔』との観音霊験性の違いの具体である。しかしながら、この男の積極性から『宇治拾遺』第一〇八話における観音霊験性をどのように考えるかについては、次の「二」で女の個別性について取り上げた後、「おわりに」で論じることとする。

二、娘と対話する『宇治拾遺』の女について

ここでは、女と娘との対話場面を中心に、(1)で対話場面における女の言葉に注目し、(2)で女と娘の関係性をみる表現に焦点を絞り、『今昔』とは異なる、『宇治拾遺』第一〇八話における観音靈驗性の内実を考えてみたい。

(1) 対話場面における女の言葉

『宇治拾遺』の表現をみると、女が実は娘の正体を予感しているのではないかととれるところがある。そこで、女は娘の正体に気付いているという仮説をたてて、次の二点からみていく。

なお、以下本文に付した記号や傍線部は、稿者が『宇治拾遺』と『今昔』で表現の違いをみたものである。論点として取り上げないものもあるが、参考のため付している。

▽娘と対話する女の敬語表現

はじめに、娘と対話する女の敬語表現をみると、次の二つの場面では、『宇治拾遺』と『今昔』の敬語使用に違いがみられた。

一つはⅢの場面における傍線部②内の「……恥を隠し給ふること」
と③「恥ヲ隠シツルカナ」、もう一つはⅤの場面における傍線部①「かたみともし給へ」と④「形見ニモ為ヨ」である。

まず、Ⅲの場面の傍線部②は、とにかくひどい有様で仕様がなほど困っていた恥を娘が隠し申し上げたことよ、という意になる。

「給ふる」の敬意の方向はおそらく男に対するものだが、『宇治拾遺』で女が男に対し敬語を用いるのはこともう一例ある。また、『今昔』の傍線部③では単に「恥ヲ隠シツルカナ」とするのを、『宇治拾遺』は「とにかくにあさましくて……いとおしかりつる恥」と表現する女の言葉からは、男よりもむしろ娘に対する意識を強く表わしている。

次にⅤの場面をみる。この場面は、世話の礼に、女が娘に紅の生絹の袴を贈ろうとするとところで、また『宇治拾遺』で女が娘に唯一

Ⅲ (宇治拾遺)

この人くもて饗応し、

①もの食はせ、酒飲ませはてて入來たれば、
「こはいかに。」

我親の生き返おはしたるなめり。

②とにかくにあさましくて、すべき方なく、
いとおしかりつる恥を隠し給ふること」
といひて、悦泣きければ、……

(今昔)

……心ノ如ク此ノ者共ヲ饗応シツ。

其ノ後、女ニ云ク、

「此ハ何ニ、

「我ガ祖ノ生返テ御シタルナムメリ」トナム思フ。

③恥ヲ隠シツルカナ」
ト云テ泣ケバ、……

敬語を使用する対話場面でもある。『宇治拾遺』の傍線部①「かたみとし給へ」では、女が娘に対し敬意を表して袴を取らせようとする一方、『今昔』の傍線部④では「形見ニモ為ヨ」とする。『今昔』では、女の娘に対する会話文で敬語を用いた表現は一切ない。

加えていうと、Vの傍線部①、④の言葉の後、最初は拒んだ袴を娘が受け取っていることに注意して『今昔』の方を見ると、傍線部④の後に「泣く取ラスレバ」とある。これは、『今昔』における袴の贈与が傍線部④の女の言葉と涙の懇願によって成功したという文脈を構造化していることになる。一方の『宇治拾遺』は「猶とらすれば」とあるだけで、泣く表現はみられない。よって、『宇治拾遺』はこの傍線部①の言葉が、娘の気持ちを变えさせ、袴を受け取らせる決め手になったことになる。そしてこの言葉は『宇治拾遺』にお

V (宇治拾遺)

「この年比も、さそふ水あればと思ひわたりつるに、思もかけず「具して往なん」と、この人のいへば、明日は知らねども、したがひなんずれば、①かたみとし給へ」とて、猶とらすれば、

「②御心ざしの程は、

返くもおろかには思給まじけれども、かたみなど仰らるゝが、かたじけなければ」とて③取りなんとするをも、程なき所なれば、この男、聞き臥したり。……

いて、女が娘にかけた最後の言葉であることから、必竟女が娘に対し、自分はあなたが観音の化身であることに気付いていたのだ、と自分から匂わせたと捉えることができる。そうすると、『宇治拾遺』の「し給へ」という表現が、女から観音の化身に対する敬意として娘にも納得されたとする根拠になるのである。

▽「なめり」と「なりけり」にみる女の予感と確信

第二に、女はいつから娘が観音の化身だと勘づいたのかについて、そのことが示唆される「なめり」という表現を追っていく。『宇治拾遺』における「なめり」の使用は次の三つである。対応する『今昔』の本文とともに次に併記する(以下、⑤は『宇治拾遺』、⑥は『今昔』を指す)。

(今昔)

「此ノ年来ハ、「倡フ水有ラバ」ト思渡ツルヲ、不思係ズ此ノ人、「具シテ行カム」ト云ヘバ、明日ハ不知ズ、随テ行キナムズレバ、④形見ニモ為ヨ」トテ、泣く取ラスレバ、

「此形見ヲ仰セラル、ガ忝ケレバ」

トテ、⑤得テ去ヌ。

程下無キ所ナレバ、此ノ男虚寝シテ、此云フヲ聞キ臥タリ。……

1 ㊦「……」とのたまふと見て覚めぬ。「この仏の助け給ふべき

なめり」と思ひて、水うち浴みて参りて、……

㊦「……」ト云フト見テ夢覺ヌ。「観音ノ我レヲ助ケ給ハムズル也ケリ」ト思テ、忽ニ水ヲ浴テ、観音ノ御前ヘニ詣デ、礼拝ス。……

2 ㊦「……たのもしげにいひて往ぬるは、とかく、たゞ観音の導かせ給なめり」と思て、いとゞ手をすりて念じ奉る程に、……

㊦「何ニモ此ノ観音ノ助ケ給フ也ケリ」ト思テ、手ヲ摺テ弥ヨ念ジ奉ル程ニ、……

3 ㊦「こはいかに、我が親の生き返りおはしたるなめり。……」

㊦「此ハ何ニ、我ガ祖ノ生返テ御シタルナムメリ」トナム思フ。……

1と2は観音の靈験を感じた後の女の心中文である。これらを見ると、1と2に共通して『宇治拾遺』と『今昔』の文末表現に「なめり」／「也ケリ」の違いのあることがわかる。ただ、1の『今昔』は「給ハムズル也ケリ」であり、2の「給フ也ケリ」に比べて文意に推量を含むことは留意しておく必要がある。3は、娘が男達の食事を用意し、歓待する場面を見た女の發話である。ここでは、「なめり」／「ナムメリ」とあることから文末に「なめり」を用いることが『宇治拾遺』特有の表現でないことがわかる。実際、『今昔』全体においても、「ナムメリ」、「ナメリ」の表現は多くみられる。それでは、先にみた1、2が観音の靈験を感じた女の心中文であったことに注目して、女が観音の靈験を感じた他の部分で表現に違い

があるかを確認すると、次の二例が見出せる。

一つは話の終盤、女が男とともに美濃へ発つ前に観音堂に参った場面で、娘に与えたはずの袴が観音の肩に掛っているのを見つけたときの女の心中文である。

4 ㊦「こはいかに、この女と思つるは、さは、この観音のせさせ給なりけり」と思ふに、……

㊦「然ハ、此ノ女ト思ヒツルハ、観音ノ変ジテ助ケ給ヒケル也ケリ」ト思フニ、……

用例4では「宇治拾遺」、『今昔』の両方が「なりけり」／「也ケリ」を用い、女が観音の靈験を実感していることを表現する。

もう一つは、次のⅥの場面にみる傍線部②と③である。こちらは本話の最後から二文目に位置し、女の心中文でなく、語り手が本話における観音の靈験について触れる一文である。

Ⅵの場面で「宇治拾遺」の傍線部①「それより後、……」から続けて傍線部②をみると「なりけり」で文が終止しており、文脈は女が敦賀を去り、美濃へ行った後も娘が女を訪ねてくることがなかったため、これらはすべてこの観音がなさったことだったのだという意になる。このⅥは先掲の4の後に続く場面なので、娘が観音の化身であったことは一度語られていることだが、終末部分で再度述べるのは、女に起こったことが観音の化身によるものであることを客観的事実として追認するためかと推測する。

一方で、『今昔』の方は、傍線部①に当たるものではなく、「此レ」が指すものを補うと、現れた娘がいくら探させても見つからなかったのは、この出来事がすべて観音が「誓」をお誤りにならないよう

VI (宇治拾遺)

ありし女は、

「さる物やある」

とて、近く遠く尋させけれども、

さらに、さる女なかりけり。

①それより後、又、をとづるゝ事もなかりければ、

ひとへに、②この観音のせさせ給へるなりけり。……

(今昔)

彼ノ来レリシ女ハ、

近ク遠ク令尋ケレドモ、

更ニ然ル女無カリケリ。

此レ、

偏ニ③観音ノ誓ヲ不誤給ザルガ至ス故也。……

にするからである、という文脈になる。この「誓」について、新大系の脚注には、「三十三身に変化して衆生の危難を救うという観音の本願。普門品に説く。」とあり、この話を法華経普門品に説かれるような観音の靈験の一つに意味づけていることがわかる。

このように、『今昔』の方はこの説話をあくまで衆生を広く救う観音の靈験の一つとして扱っているようである。しかし『宇治拾遺』の方には女に起こった出来事を、衆生を救済する観音の靈験譚として一般化する表現はない。よって『宇治拾遺』が観音の化身によるものだったとするのも、あくまでこの女と男の身に起こった個人的な出来事として限定されるのである。

さて、話を元に戻すと、「なりけり」は現象や事実として客観的に認める表現とみることができそうである。一方で「なめり」については、もう少し『宇治拾遺』の他の説話から用例を引きたい。まずは、『宇治拾遺物語』九六「長谷寺参籠男、預利生事」の一節である。そもそも「藁しべ長者」の話である第九六話は長谷寺の観音靈験譚であり、『今昔物語集』巻十六第二十八「参長谷男、依観音助得富語」とは強い同話性が指摘される。ここでも『今昔』の対応

本文を併記するが、死馬を見つけた男の心中文が『今昔』では、死馬発見後、生き返った馬と布の交換が成立した場面で見られ、『宇治拾遺』に比べると明らかに後ろの位置に置かれる。

④「此馬、わが馬にならんとて死ぬるにこそあめれ。藁一筋が柑子三になりぬ。柑子三が布三匹になりたり。此布の、馬になるべきなめり」と思て、……

⑤「我レ観音ノ示現ニ依テ、藁筋一ツヲ取テ柑子三ニ成ヌ。柑子亦布三段ニ成ヌ。此ノ馬ハ仮ニ死テ、生返テ我ガ馬ト成テ、布三段ガ此馬ニ成ムズルニヤ」ト思テ、……

これを見ると、『今昔』は馬と布との交換が成立した経緯の後、この馬は一度仮死し、生き返って自分の馬となつて、その結果この布三段が馬になつたのであるうか、と推量及び疑問を表わす心中文になつてゐる。一方の『宇治拾遺』は、死馬を見つけた時点で、この馬は自分の馬にならうとして死んだのであろう、と推定している。また「此馬、……」以下について、新大系に「対象との関係を、自分の立場にひきつけての判断。第二十八話の『あはれ、これこそ、われに衣得させてんとて出たる人なめり』に似る。」と、「なるべき

なめり」については「なるというはずのようだ」という二つの脚注がある。これらに従うと、心中文の発話者が目前の状況を「自分の立場にひきつけて」判断し、この馬が死んだのは自分のものになるはずだからだ、と了解したのだと推測できる。

次に、『宇治拾遺物語』二八「袴垂、合保昌事」から「なめり」をみる。盗人である袴垂が引剥ぎをしようと獲物を待っていると、ちよと厚着をした男が一人、供も連れず、笛を吹きながら夜道をやってくる場面である。先に引いた脚注内の「あはれ、これこそ、われに衣得させてんとて出たる人なめり」は、これを「自分の立場にひきつけての判断」として「似る」というのだろう。

このようにここで挙げた『宇治拾遺』における「なめり」の用例をみると、発話者が目前の状況を主観的、感情的に判断するものであることがわかる。この「なめり」が、目前の状況を自分の立場に引きつける表現として、第一〇八話の用例1や2でも機能しているとする、と、『宇治拾遺』の女は夢から覚めた直後から、自分は観音の靈験を蒙るようだと判断し、確実にその靈験を得ようと立ち振る舞っていたことになる。つまり、女にも男や第八十六話の勝ち侍のように靈験を確実に得ようとする強かさや積極性があつたという可能性が生じるのである。

以上のことを踏まえて、女がいつ〈娘Ⅱ観音〉だと勘づいたのか、次の(2)で対話表現にみる女と娘の関係性から考えてみたい。

(2) 対話にみる女と娘の関係性

次に挙げるⅡの場面は、突然来訪した娘が身元の説明を済ませた

後の女と娘の対話で、傍線部④に(1)で挙げた「なめり」の用例2が出てくるところでもある。まず傍線部②と⑥を比べる。

この傍線部②、⑥に至るまでの文脈は『宇治拾遺』と『今昔』で類似し、傍線部①、⑤で示した違いがある程度である。そして、女が男の残していた従者たちを放っておくわけにもいかない人だと言ったことに対し、娘がそれぞれ傍線部②と⑥のように反応するのである。すなわち、『宇治拾遺』では「安き事」、『今昔』では「不便二候ケル事」という反応を見せることから、両話における娘の在り様には違いが生じ、またその娘が女と関わる場面においては、結果的にその関係にも、両話の間で違いが生じることを意味する。

さらに、傍線部⑥が困窮する女の現状に同情を示す言葉であることに注目すると、『今昔』の娘は女に寄り添った発言をしたことになる。これに比べると、『宇治拾遺』が女の言葉に対し、それは簡単なことだとした反応には、あくまで互いの位置はそのまま、一定の距離を保ちながら話を進めようとする姿勢が表れている。この距離感とは、次のⅣの場面における傍線部①、⑨からもみてとれる。

Ⅳの傍線部①、⑨は、明日男が供を連れて帰ってくると、世話する人数が七、八十人になるという女の言葉に対する娘の返答である。『宇治拾遺』の表現をみると、「さては」で七、八十人という人数の多さを受けて、「こそ」の係り結びで自らの必要性を強調しつつ、さらに「つかまつるべかななれ」の「なれ」が伝聞推定の「なり」であることに注目すると、客観的な判断によるものとして男達への対応を申し出ていることがわかる。一方の『今昔』では、「其ノ御儲ヲ構ヘ候ハム」(そのご用意をいたしましょう)とすぐに準備に

II (宇治拾遺)

「①知り扱ひ奉るべき人にやおはしますらん」といへば、

「わざとさは思はねど、

こゝに宿りたらん人の、物食はであたらんを、見過さんもうたてあるべう、

又、思ひ放つべきやうもなき人にてあるなり」といへば、

「②さては、いと安き事なり。

今日しも、かしこく参り候にけり。

さらば、まかりて、さるべきさまにて参らむ」とて、立ちて往ぬ。

「③いとほしかりつる事を、思ひかけぬ人の来て、

たのもしげにいひて往ぬるは、

④とかく、たゞ観音の導かせ給なめり」

と思て、いとゞ手をすりて念じ奉る程に、……

取りかかる返事をしている。ここでの娘は女の言葉に準備の必要性が意図されていることを暗に受け取っており、女と娘の関係において、娘は女が求めるものに気づき、すぐに対応するという主従関係が成立しているようである。この関係性と比べると、『宇治拾遺』の女と娘は、IIの場面同様、あくまで一対一の関係を保持しているようである。それは観音の化身である娘が、女に対し敬意を表しながらもそれ以上の接近がなく、一線を画して対話しているといえるからである。このことは『宇治拾遺』における娘が、あくまで女を一個人として捉え、対応しているものと言ひ換えることができる。

(今昔)

「⑤知り奉ラセ可給キ人ノ御共人ニヤ」と。参テ云ク、

「態トハ不思ネドモ、

此ニ宿リタラム人ニ物ヲ不食セデ過サムヲ口惜カルベシ。

只思ヒ可放キ人ニモ非ズ」と。女ノ云ク、

「⑥糸不便ニ候ケル事カナ。

今日シモ賢ク参リ候ヒニケリ。

然ラバ返テ、其ノ事構テ参ラム」と云テ出ヌレバ、亦、

「⑦何ニモ此ノ観音ノ助ケ給也ケリ」

ト思テ、手ヲ摺るテ弥ヨ念ジ奉ル程ニ、……

う。『宇治拾遺』の話末部分について、『今昔』とは異なり、男女両方の幸せを語り、観音靈驗譚として一般化しないことを先に述べた。つまり『宇治拾遺』は、女を一個人として扱い、一般化しないことで、その個性を最後まで保障しているのである。

最後に女がいつ〈娘＝観音〉だと気付いたかの問題について、先掲IIの場面における傍線部③をみておく。娘が準備をしにこの場を一旦去った後、『宇治拾遺』の女は「いとほしかりつる事を、思いかけぬ人の来て、たのもしげにいひて往ぬるは、」と娘の来訪を振

IV (宇治拾遺)

「いさ、まことにやあらん、

明日の夕さり、こゝに來べかんなる。

ともに、このある物ども具して、

七八十人ばかりぞありし」

といへば、

「①さては、その御まうけこそつかまつるべかんなれ」

といへば、

「②これだに、思ひもかけずうれしきに、

さまでは、いかゞあらん」

といふ。……

(今昔)

「不知ヤ、実ニヤ有ラム、

明日ノ夕方、此ニ可來シ」 トゾ聞ク。

共ニ有ル者・此ニ留タル者ノ取り加エ

七八十人許ゾ有シ」

ト云ヘバ、女、

「⑨其ノ御儲ヲ構ヘ候ハム」

ト云フニ、

「⑩今日ダニ不思係ヌニ、

其マデニ何ガ可有キ」

ト云ヘバ、……

同話である『今昔』説話の表現と比較して説話を読み解き、『宇治拾遺』説話が表わす観音靈驗性を考察してきた。

まず、「一」では男の扱いについて、『宇治拾遺』は『今昔』に比べ、男も視点人物として設定していること、また『宇治拾遺』には男が積極的に観音の靈驗を得ようと行動する表現があることを述べた。つまり、『宇治拾遺』第一〇八話には男の主体がせり出している部分を確認でき、男もまた女と同様、本話で観音の靈驗を受けた者として読み取ることができるのである。

次いで「二」では、話題を女に移し、女の言葉にみる敬語表現や「なめり」を手がかりに、女が〈娘〓観音〉だと勘づいているのではないかと仮説をたて、その他の場面や『宇治拾遺』の他の説話を参照しながら、仮説の検証を試みた。そして女が〈娘〓観音〉だと予感したことを『宇治拾遺』における表現から読み取り、おそらくこの場面で予感したであろうというⅡの場面についても言及した。

り返る心中文がある。「思いかけぬ人」とは娘のことで、「たのもしげに」言葉を残して立ち去ったことを、傍線部④「たゞ観音の導かせ給なめり」というのである。『宇治拾遺』の心中文には、老僧が夢で言った男とは違う、「思いかけぬ人」として娘が女に意識されたことと、この来訪は観音の導きだと女が感じ入っていることから、〈娘〓観音〉という予感が女に生じたとすれば、この場面だと考えられる。一方の『今昔』にも女の心中文はあるが、観音の救いを実感する言葉だけで、娘のことには触れないことから、『今昔』における女の言葉は、あくまで事態に対する観音の靈驗を実感したものと捉えることができる。

おわりに まとめにかえて

ここまで、『宇治拾遺』第一〇八話について、対話表現を中心に、

このことと並行して、女の言葉には男同様、確実に観音の靈験を得ようとする積極性をみることができ、また『今昔』に比べると、『宇治拾遺』の女と娘との関係には一貫して一定の距離感をみることができた。このことは、観音の靈験として一般化しない『宇治拾遺』の話末とも一致するもので、女同様、自ら観音の靈験を確実に得ようと行動した男においても、個人レベルの靈験性を取り上げていることを意味する。

以上のことから、『宇治拾遺』第一〇八話は、『今昔』と比べ観音靈験の普遍性が後退し、それは、観音の靈験を受ける男と女、それぞれが個としてもつ性質を語るために相対的に生じた希薄化であると結論づけることができる。さらにこの個としてもつ性質を個別性としたとき、それぞれがもつ個別性に対し観音が靈験を与えていることから、観音もまた個人レベルで人を救済する存在として登場するのである。

注

- (1) 自己と対話する男の言葉から観音靈験性の違いを論じたものに、山口眞琴「葛藤する観音靈験譚―「薬しべ長者」説話放」(『言語表現研究』一七、二〇〇一・三)がある。

- (2) 『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八四)より引用。

- (3) 山田富秋の「会話の順番取り」には、「会話にはつぎに誰が話すのかを決め、発話の順番をうまく配分する規則」、「その発話がどこで終わる可能性があるのか、つまり発話の潜在的完結

点の予測を可能にする規則」、「会話に参加している者は互いに発話の順番の交替を何らかのかたちで予測し、相互に調整することができ」る仕組みが機能している。会話分析を創始したハーヴェイ・サックスたちはこのような規則体系を、「会話の順番取りシステム (turn-taking system)」と呼んだ」とある(好井裕明・山田富秋・西阪仰編『会話分析への招待』1「会話分析を始めよう」2(世界思想社、一九九九))。

- (4) もう一例は、男とその家来たちが娘の家に宿った初日の夜更け、男が娘の部屋を訪ねた場面で、男の問いかけに娘が「何事か侍らん」と返答したところにみえる。なお、『今昔』の同場面に娘の返答はない。

- (5) 「なめり」と「なりけり」について、小松光三「なめり」「なめり」「なりけり」の意味機能」(『愛媛国文研究』三三、一九八二・一二)に、次のような指摘がある。「……「なめり」は、単なる表層の事柄の描写ではなく、対象の内部に存在する実相を洞察している」。また「なりけり」については、糸井通浩「なりけり」(『構文―平安朝和歌文体序説』(『古代文学言語の研究』後編(五)2(和泉書院、二〇一八))に、「理法」の存在を確認する表現である」という指摘がある。

(かわぐち あきこ・和歌山県立日高高等学校)

